

濁音表記のことなど——対音資料についてのメモ

中村雅之

1. 対音資料における濁音

漢語近世音を表す表音文字資料は、濁音(いわゆる全濁音)の扱いによって、

- (a) 13-14世紀のパスパ文字や15世紀のハングル(『洪武正韻訳訓』の俗音)のように濁音声母を独立したカテゴリーとして表記するもの
- (b) 10-12世紀の契丹小字や16世紀のハングル(「翻訳老乞大・朴通事」の右側音)、そして17-19世紀の満洲文字のように濁音にあたる声母を表記しないもの

の二類に分けられる。前者は外見上、声母が三項対立(全清、次清、全濁)をなしており、それを素直に現実の音声の反映と見れば、近世北方漢語には無声無気と無声有気のほかに有声破裂・破擦音の声母があったことになるが、後者の資料群がそのような想定を許さない。

表音文字は実際の言語音を反映することが第一義的な目的である、というのが常識的な理解であろう。パスパ文字やハングルのように、その表記法が考案された初期段階において、すでに実際の音声に対応しない全濁音の表記が含まれているのは何故か、というのが本稿のテーマである。もっとも、その結論は単純で、伝統的な漢語音韻学の影響を受けたためということなのだが、それでは他の文字はなぜ影響を受けていないのかということも併せて考えたい。

2. 表記方法

一般に、表音文字で言語を表記する場合、表音主義と形態素主義の二様の方法がある。表音主義は、話される実際の音を可能な限り忠実に表記しようとするもので、ギリシア文字やラテン文字は元来、表音主義を目指したものと考えられる。形態素主義は、現在のヨーロッパ諸語におけるラテン文字の使用法の多くがこれに属するが、個々の形態素に一定の綴りを与える方法で、時に表音性を犠牲にする。フランス語では多くの場合、語末子音が発音されないが、発音されなくなった子音をいまだに表記するのは、形態素の識別を容易にするためである。ドイツ語の Tag-(英語 day に相当)の「g」は単数主格では[k]で、他の格では[g]で発音されるが、綴りには常に「g」を用いる。またロシア語の前置詞「в」(ラテン文字「v」に相当。意味は英語の「in」)は、有声音の前で[v]、無声音の前で[f]と発音されるが、綴りは常に「в」を用いる。これらは同一形態素であることの視認性を確保するための正書法である。

概略的に言えば、パスパ文字の漢語表記や、『洪武正韻訳訓』のハングル表記は表音主義よりは形態素主義に傾き、契丹小字や「翻訳老乞大・朴通事」の右側音、満洲文字の漢語表記などは表音主義を重んじたものと言える。漢字はいわば形態素主義の極致というべき表記法であるが、国家の威信を背景に施行されたパスパ文字やハングルが、漢語表記において漢字の形態素主義から離れることをよしとしなかったのは自然なことかもしれない。換言すれば、パスパ文字や初期ハングルの漢語表記はあくまでも漢字の代用(あるいは漢字からの変換)に

過ぎず、実際の漢語音を正確に表記しようという意図はやや希薄であったと考えるべきなのであろう。

### 3. 音韻学の利用

パスパ文字やハングルでいかに漢語を表記するかという問題に直面した時、韻書や韻図を用いてその枠組みを利用するという方法が取られた。そのことは漢語表記の正書法が、パスパ文字では『蒙古韻略』(佚書)や『蒙古字韻』、ハングルでは『洪武正韻訳訓』という、韻書ないし韻書形式の書によって示されたことによって明らかである。伝統的な音韻学では声母を表すのに三十六字母を用いるが、そこには全濁音の字母が用いられているため、パスパ文字や初期ハングルでも漢字音を示すのに全濁音声母を表す字母を作らざるを得なかった。表音主義によるならば必要のない全濁音声母を、理論的な‘正音’として採用した訳である。それによって実際の発音から遠ざかる一方で、漢字音表記と漢字を対応させやすくなったと言える。

### 4. 表音主義

契丹小字と「翻訳老乞大・朴通事」右側音ではなぜ形態素主義をとらず、表音主義を採用したのか。それは、それぞれの既存の表記である契丹大字と初期ハングルの補完するためであったと考えられる。

契丹大字の全容は明らかではないが、漢字に近い形態素主義的な表記であることは間違いない。固有の契丹語にせよ漢語語彙にせよ、実際の発音は表記からほとんど分からない。そこで表音主義に基づく表記法を契丹小字として新たに作り、表記法を補完しようとしたのである。目的が表音主義である以上、実際の音と対応しない韻書や韻図を利用しなかったのは当然の措置であった。

「翻訳老乞大・朴通事」の右側音は編者の崔世珍自身が述べるように、朝鮮語を表記するのと同じような読みやすい表記によって漢語音を示したものである。つまり、『洪武正韻訳訓』のような形態素主義ではなく、表音主義に徹し、かつ平易な表記法によっている。朝鮮語のハングル表記は現在では形態素主義を取っているが、初期のハングル表記では驚くほどの表音主義である。崔世珍は漢語表記においても同様の方法を用いることによって、『洪武正韻訳訓』のような読みにくい表記を補ったわけである。

満洲文字についてはやや事情が異なる。満洲文字は当初の無圏点満洲文字の時代から一応は表音主義を目指していたと言える。しかしながら、一つの字母が複数の音素に対応するというモンゴル文字以来の特徴を踏襲していたため、有圏点満洲文字に改良して音素の厳密な区別を可能にした。高度な表音性を求めて文字に改良を加えた以上、それによって表記された漢字音の中に「濁音」のような理論的な範疇が入り込む余地はなかったのであろう。

### 5. 対音資料の扱い方

かつて服部四郎氏はパスパ文字の濁音表記を実際の音声の反映とみなし、杭州音に基づく

という案を提示した。その表記を実際以上に表音主義的なものと誤解したのである。また、「翻訳老乞大・朴通事」の左側音(『洪武正韻訳訓』の俗音と同種の表記)と右側音について、過去に多くの学者が、左側音を(実在する)正音ないし雅音とみなし、右側音を俗音とみなした。左側音において濁音と入声韻尾(らしきもの)の表記が見えるのを、必要以上に表音主義的にとらえた結果である。これらの誤解は、つまるところ対音資料の扱いに慣れていないことに起因する。

資料の表記を無批判に実際の言語音の反映と見るのは、あたかも太陽や星の運行を見て天動説を唱えるようなものである。複数の資料の対照によって、どの資料がより実際の言語音をよく反映しているか、あるいはどの資料が伝統的な音韻資料を利用した理論的な枠組みを含んでいるかを見極めなければならない。濁音のような虚構の衣を取り去ってこそ、パスパ文字やハングルが近世音研究の一級資料になるのである。